研究報告

紙芝居のテキストの特徴
−物語の魅力を伝える読み聞かせのために知っておきたいこと−

原田　留美
新潟青陵大学福祉心理学部社会福祉学科

Special particularities of kamishibai texts: hints for making the reading of kamishibai to children more interesting

Rumi Harada
NIIGATA SEIRYO UNIVERSITY FACULTY OF SOCIAL WELFARE AND PSYCHOLOGY
DEPARTMENT OF SOCIAL WELFARE

要旨
紙芝居は、絵本と並んで、幼児教育の場で良く用いられる教材である。その紙芝居のテキストには、幼年童話や絵本とは異なる特徴がある。情景描写や心理の伝え方が簡潔で、地の文は少なくセリフが多い。また、オノマトペ（擬音語・擬態語）を活用することでわかりやすさに配慮する傾向も見られる。しかし、松谷みよ子の幼年童話「ママになんか　わかんない」と、それを紙芝居にした『ちゅうしゃにいった　モモちゃん』のテキストを比較したところ、山場での主人公の心理については、幼年童話作品以上に筆が費やされていることが確認出来た。紙芝居のテキストはすべてが簡潔というわけではない。紙芝居の読み聞かせの際には、このことを念頭に置く必要がある。丁寧に描かれている部分については、特にその場面の重要性を意識した読み方を工夫し、その作品の魅力が聞き手に伝わるよう配慮することが肝要である。

キーワード
紙芝居、童話、松谷みよ子、読み聞かせ、領域「言葉」

Abstract
Kamishibai (stories read aloud, with pictures changed at regular intervals in a frame) are educational materials used in Japan as often as picture books, in teaching young children. The texts of these kamishibai have been reported to often differ in particular ways from picture books and other story written for children: visual details and the characters' mental and emotional states are often summarily described, with less narration, more spoken dialogue, and more onomatopoeia to facilitate comprehension of the action. However, our study discovered that in the kamishibai version of the book by Miyoko Matsutani, Mama ni Nanka Wakannai (Mommy Doesn't Understand Me), called Chuusha ni Itta Momo-Chan (Little Momo Gets an Injection), at the story's climax, the main character's thoughts and feelings are actually described at greater length in the kamishibai version than in the original. It is therefore not always the case that kamishibai only give summary versions of their original stories. Hence the importance of being aware of these facts when reading kamishibai to children: when certain aspects of a character's mental state are described in fuller detail, these passages should be read in a way conveying their importance, and rendering the reading of the kamishibai more interesting to the listeners.

Key words
kamishibai, children's stories, Miyoko Matsutani, reading to children, childcare content (language)

Ⅰ　研究の対象と目的、方法

紙芝居は、幼稚園や保育園においては、絵本や幼年童話と並んで読み聞かせによく用いられる。子どもの言葉の発達を支える児童文化財の一つである。しかし、紙芝居と絵本等とでは、性格に違いがある。絵本・幼年童話は、脇役や小道具、状況や心情・情景等を丁寧に描き、地の文も比較的多い。それに対して紙芝居は、主要な登場人物や出来事など、物語展開にとって必要不可欠な要素を中心に構成されている。また、地の文よりもセリフが多いという特徴をもつことが、まついらによって指摘されている[1][2]。（まつい：1998、子どもの文化研究所：2015）

筆者は以前、同じ物語の幼年童話版と紙芝居版のテキストを比較し、その違いについて整理考察した[3]。（原田：2001）当該論文における考察の対象は、松谷みよ子の幼年童話作品「ももちゃんが　うまれたとき」（『ちいさいモモちゃん』講談社　1974年　所収）と、紙芝居『モモちゃんが　あかちゃんだったとき』（童心社）であった。その結果として、次のものを紙芝居のテキストの特徴として挙げた。

1．情景描写や場面のイメージを伝える表現は多くない。
2．心理をシンプルに描く傾向がある。
3．わかりやすさのためにオノマトペを積極的に用いている。
4．セリフ中心で、地の文は省略されることが多い。
5．呼びかけ調の表現を積極的に用いるなど、聞き手を意識したものになっている。

この折に得られた結果と、まついらが指摘した特徴との間に大きな齟齬はなかった。

上の結果は総じて、紙芝居のテキストの簡潔さを示すものとなっている。しかし、紙芝居ならではの、筆の費やされ方というものもあるのではないか。

作中に筆を費やしている場面があるのならば、そこは紙芝居作者が重要と捉えている場面と考えられる。大元は、保育教材としての紙芝居であっても演劇性や大衆性が本質であることには変わりがなく、その紙芝居の本質が生かされるのは「演じ手、すなわち読み手次第」だと言う[4]（大元：2013）。大元のこの指摘は、紙芝居の読み聞かせの際には入念な準備・練習が必要ということにつながる。紙芝居の読み聞かせは、ただ滑らかに読むことができればよいのではなく、物語展開の起伏を踏まえた上で登場人物の人柄や心理、情景等を効果的に表現することが肝要である。紙芝居作者が筆を費やしている場面は、魅力的な読み聞かせ実践の際に特に意識すべき部分と捉えるべきであろう。

今回は、読み聞かせの際にとりわけ意識する必要がある場面、すなわち筆が費やされている場面のテキストの検討を通して、読み手（演じ手）が知っておくべき紙芝居の言語表現の特徴を明らかにするために、「モモちゃんシリーズ」の別の幼年童話作品と紙芝居のテキストについて、比較対照、検討する。考察の対象とするのは、以下の２作品である。

幼年童話：松谷みよ子「ママになんか　わかんない」『ちいさいモモちゃん』(講談社1974年)所収。当該作品の初版は1964年である。参照したのは2009年発行94刷である。

紙芝居：松谷みよ子(脚本)、鈴木未央子（画）『ちゅうしゃにいった　モモちゃん』「松谷みよ子かみしばい・ちいさいモモちゃん」シリーズ所収（童心社　1973年）。ただし、参照したのは2002年発行の第17刷のものである。

上記２作品のあらすじは以下の通りである。

水疱瘡にかかった３歳児のモモちゃんが、「もうおねえちゃんなのだから、お医者さんに行っても泣かずに受診できるはず」とママに言われ、医院で受診する。注射の時も泣かずに我慢する。ところが、そのご褒美としてのガムがこれまで通りのものであったことに

納得できず、自分はおねえちゃんなのだからそれにふさわしいご褒美があってしかるべきだという思いで、泣いて抗議する。

なお、幼年童話版にのみ後日談がある。モモちゃんはキュウリを水疱瘡患者に見立ててごっこ遊びをするが、ママにキュウリを取り上げられてしまい、またもや納得できずに泣くという展開になっている。本稿では、紙芝居のテキストの特徴を探ることが目的のため、水疱瘡に関するエピソードを中心に考察していくこととする。

研究の方法については、テキスト対照表を作成の上、語彙や表現について比較検討する。

紙芝居は絵が重要な児童文化財であるため、絵とテキストの両方について考察すべきという考えもあろうが、今回はテキスト中心の考察としていくことをあらかじめ断っておく。

Ⅱ　幼年童話と紙芝居のテキスト対照表

まず、幼年童話と紙芝居（以下、それぞれ童話版、紙芝居版と呼ぶこととする。）両者のテキストを比較しやすいようにまとめた表を示す。分析の便宜のため、物語を第１場面から第５場面に分けた。この分け方は、物語展開を把握するために行ったものであるので、幼年童話作品のページ配置や紙芝居作品の場面とは必ずしも一致しない。なお、物語の山場は二つある。一つは、モモちゃんが泣かずに受診する第4場面。もう一つは、これまでとは違って自分はおねえちゃんになったのだから、そのご褒美も今までとは違うものになるはず、という期待が裏切られて、モモちゃんが泣いて抗議をする第5場面である。

表中、四種の下線を使用している。その意味するところは次の通りである。

波線は、童話版のみにみられる特徴的な表現に付した。

破線は、紙芝居版のみにみられる特徴的な表現に付した。

一重下線と二重下線は、童話版と紙芝居版両方にみられる内容であるが、表現に大きな違いがある部分について付した。一重下線は童話版に、二重下線は紙芝居版に用いた。

このほか、紙芝居の抜き等についての指示書きは太字で示した。

見やすさに配慮し、ふりがなはすべて省略した。以下、各章の引用文も同じである。

表１　紙芝居版と幼年童話版のテキスト対照表

場面	幼年童話版	紙芝居版
第１場面	三つになったモモちゃんが、だいすきなうたは、おねえちゃんだもん、のうたです。 おねえちゃんだもん 大きいんだもん おかおだって　あらえるし おつかいだって　できるのよ モモちゃんは、まいにちまいにち、このうたを、大きなこえでうたっていました。	三つに　なった　モモちゃんが、だいすきなうたは、おねえちゃんだもん、のうたです。 おねえちゃんだもん おおきいんだもん おかおだって　あらえるし おつかいだって　できるのよ モモちゃんは、まいにち　まいにち　この　うたを、おおきな　こえで、うたっていました。 **―ぬきながら―**
第２場面	ところが、ある日のことです。<u>たいへんなことがおこりました。モモちゃんのからだに、ぽっちん、ぽっちん、あらあら、ほっぺたにも、あ</u>	ところが、ある　日の　ことです。 <u>「あらあら　たいへん、モモちゃんの　からだに　ぽっちん　ぽっちん、ほっぺたにも　おへ</u>

第2場面	らあら、せなかにも、あらあら、おへそのまわりにも、赤いぶつぶつが、でてきたんです。 「水ぼうそうよ。きっと。」 ママがいいました。 「みじゅぼうしょう？」 モモちゃんが、いいました。 「そう、だから、おいしゃさんに、いかなくっちゃ。」 「おちゅうしゃする？」 「たぶんね。」 ママが、へんじしました。 モモちゃんは、「たぶん」てなんだろう。しない、っていわないんだから、するほうらしいな。そうおもって口をまげ、うえーん、ってなこうとおもったとき、……ママが、うたいました。 おねえちゃんだもん 大きいんだもん おちゅうしゃだって　なかないし おくすりだって　のめるのよ 「モモちゃん、なかないよ。おねえちゃんだもん。」 モモちゃんは、なきたいのを、ぐっとがまんして、いいました。 そこでママとモモちゃんは、手をつないで、おいしゃさんに、でかけました。	その　まわりにも、赤い　ぶつぶつが、でてきたわ。ははあ　これはね、みずぼうそうよ、きっと。」 「みじゅぼうしょう？」 「そう、だから　おいしゃさんに　いかなくちゃ。」 「おちゅうしゃ、する？」 「たぶんね。」 モモちゃんは、 「たぶん」って、なんだろう。しないって　いわないんだから、するほうらしいな。 そう　おもって　口を　まげ、うえーんって、なこうと　しました。 ところが　その　とき、ママが　うたいました。 **―ぬきながら―** おねえちゃんだもん おおきいんだもん おちゅうしゃだって　なかないし おくすりだって　のめるのよ 「モモちゃん　なかないよ、おねえちゃんだもん。」 モモちゃんは、なきたいのを　ぐっと　がまんして　いいました。 **―ぬきながら―** そこで　ママと　モモちゃんは、おいしゃさんに　でかけました。
第3場面	おいしゃさんは、えきのちかくです。そしてえきのちかくには、モモちゃんの、だあいすきな、おかしやさんが、ありました。 「ガム、ほしい。」 モモちゃんは、たちどまって、いいました。 「かえりにね。」 ママが、いいました。 「なかなかったら、かってくれるんだもんね。」 モモちゃんがいいました。	おいしゃさんへ　いく　とちゅうに　おかしやさんが　ありました。 「ガム　ほしい。」 モモちゃんは、たちどまって　いいました。 「かえりにね。」 「なかなかったら、かって　くれるんだもんね。」 モモちゃんは、はねました。 **（間）** **―ぬく―**

第4場面	おいしゃさんにつくと、まんいんです。ひとり、ふたり、三人、四人、五人かんじゃさんがいました。 六人めが、モモちゃんです。 そのうち、ふたりめも、三人めも、四人めも、五人めもおわって、モモちゃんは、 「モモちゃーん、どうぞ。おはいりくださーい。」 って、よばれました。 いつもならもうここで、ふぇんふぇんって、べそをかくところです。 でも、なきませんよ、モモちゃんは。むねをとんとんて、たたくあいだも、お口をああんてするあいだも、ちっともなかないで、がまんしていました。 そうしたら、おいしゃさんが、いいました。 「水ぼうそうです。おくすりをあげますから、からだじゅうに、ぺたぺたぬってください。さて、それから……。」 おいしゃさんは、くびをかしげました。 「モモちゃんは、なくかな？　なかないかな？　おちゅうしゃ、しようね。」 「なかないもん。」 「ほっほう、なかない？　えらい、えらい。じゃあ、一本やろうね。」 つめたいだっしめんで、うでをすうっとふいて、ちょっとつまんで、ちくん！ はっ。モモちゃんは、ためいきをついたけど、とうとう、なきませんでした。 「えらい、えらい。」 「えらい、えらい。」 おいしゃさんも、ママも、ほめてくれました。	おいしゃさんに　つくと 「あら、たいへん。ぶつぶつが　できて　いますね。すぐ　せんせいに　みて　いただきましょう。」 と、かんごふさんが　いいました。 いつもなら　ここで、フェンフェンって　なくところです。 **―ぬく―** でも、なきませんよ、モモちゃんは。 むねを　トントンって　たたく　あいだも、おくちを　アーンって　する　あいだも、ちっとも　なかないで、がまんして　いました。 「ふうむ、これは　みずぼうそうですな。おくすりを　あげますから、からだじゅうに　ぺたぺた　ぬって　ください。さて、それから……。」 おいしゃさんは、くびを　かしげました。 「モモちゃんは　なくかな？　なかないかな？　おちゅうしゃ　しようね。」 「モモちゃん、なかないもん。」 「ほっほう、なかない？　えらい　えらい。 **―ぬきながら―** じゃあ、一本　やろうね。」 つめたい　だっしめんで、うでを　すうっと、ふいて、ちょっと　つまんで、ちくん！ はっ、モモちゃんは、ためいきを　ついたけど、とうとう　なきませんでした。 「えらい、えらい。」 「えらい、えらい。」 おいしゃさんも　ママも　ほめて　くれました。 **―ぬきながら―**
第5場面	ところが、そのかえりみちです。	ところが、その　かえりみちです。 モモちゃんは　うれしくて　はねながら、ママと　あるいて　いきました。

第5場面		おねえちゃんだもん おおきいんだもん おちゅうしゃだって　なかないし おくすりだって　のめるのよ 「ね、ママ、モモちゃん　つよいもんね。」 「そうですとも、もう　三つに　なったんですもん、おねえさんですもん、おおきいんですもん、ね。」
		―ぬきながら―
	おかしやさんのとこまできました。やくそくしたもんね。だいじょうぶ、ママはわすれていませんよ。がま口を、パチンとあけました。	「あっ、ママ　おかしやさんだ。」 「ね、ママ、やくそく　したもんね。」 「だいじょうぶ。ママは、わすれて　いませんよ。」 がまぐちを　だして、パチンと　あけました。
	「ガムくださいな。そう、オレンジの十えんのね。」	「ガム　くださいな。そう、モモちゃん　オレンジが　すきね。そっちの　オレンジの　三十えんの……。」
	モモちゃんは、びっくりしました。	モモちゃんは　びっくり　しました。
		―はやくぬく―
		「ママ、いま　なんて　いったの。」 「三十えんの　くださいって、いったのよ。」
	「やあん、二十えんのガムよう。」 「まあ、いつもガムは、十えんのにきめてあるでしょ、いけません。」 「だってえ、モモちゃん、もう大きいから、おちゅうしゃしてもなきませんねって、ママいったあ、だもん。だもん。ああん。」	「やぁんやぁん　六十えんのよう。」 「まあ、なに　いってるの。いつも、ガムは三十えんのに　きめてあるでしょ、いけません。」 「だってえ　だってえ。」 モモちゃんの　目に、なみだが　うかんで　きました。 うわーん
		―さっとぬく―
		「うわーん　あんあんあん　うわーん　あんあんあん　ママ　いったあ、モモちゃん、もう　おおきく　なったから、お、お、おちゅうしゃ　しても　なきませんねって、ママ　いったあ、だもん　だもん。」
	ああ、あんまりです。おちゅうしゃするときだけ、大きいんだもん、て、いうなんて……。 モモちゃんは、なみだをふりとばし、おう、おうと、なきつづけました。	ああ、あんまりです。 おちゅうしゃ　する　ときだけ、おおきいんだもんって、いう　なんて……。
	「モモちゃん、大きいんだもん。おねえちゃん	「おおきいんだあ、おおきいんだあ。おねえち

	だもん。そういったあ、だもん。二十えんのガムだあ、ああん、ああん。ママなんか、わかんないんだあ。」	ゃんだもん。六十えんの　ガムだあ、ああん。」 なみだを　ふりとばして、モモちゃんは　おうおう、なきつづけ、 **―ぬきながら―** とうとう、 「ママになんか　わからないんだあ。」 ママは　こまって、ほーら、あんな　かお　して　います。 さあ、ママは　どう　するでしょうね？ みんなで　かんがえて　くださいね。

※ガムの値段が、童話版と紙芝居版とで異なっているが、それぞれの初版出版時の物価を反映させたものと推測する。よってここでは問題視しない。

Ⅲ　前回の考察結果と一致する点について

まず本章では、Ⅰに示した前回の考察結果[3)]（原田:2001）と一致する点について整理する。

1．情景描写や場面のイメージを伝える表現の簡潔さ

これの例として、表1第3場面の初めの、家から医院への道中にある菓子店についての言及部分を挙げる。童話版では、「おいしゃさんは、えきのちかくです。そしてえきのちかくには、モモちゃんの、だあいすきな、おかしやさんが、ありました。」とあり、町の様子の記述が見られる。一方紙芝居は、「おいしゃさんへ　いく　とちゅうに　おかしやさんが　ありました。」となっている。物語にとって重要でない駅についての言及はない。

2．心理の伝え方の簡潔さ

このことがよく分かるのが、第4場面、モモちゃんとママが医院に着いたあとの場面である。童話版では、待合室に5人の患者が待っていることが示され、続いて次のような描写がある。

おいしゃさんにつくと、まんいんです。ひとり、ふたり、三人、四人、五人かんじゃさんがいました。

六人めが、モモちゃんです。

そのうち、ふたりめも、三人めも、四人めも、五人めもおわって、モモちゃんは、

「モモちゃーん、どうぞ。おはいりくださーい。」

って、よばれました。

おいしゃさんが苦手なモモちゃんにとって、先に待っている患者が一人減り、二人減りして、自分の番が近づいてくることは、ストレスであろう。徐々に不安が高まっていく様子が伝わる部分である。

これに対し紙芝居版は、医院に着くやいなや、すぐに診療室に案内されていると読める書き方になっている。物語の最初の山場である、受診の場面にすぐ入ることになっている。

3．オノマトペの使い方

今回の考察対象作品の場合、童話版よりも紙芝居版にオノマトペが量的に多いという傾向は認められない。しかし、紙芝居版ではオノマトペの多くがカタカナ表記になっており、テキストを見たときに目立つ形になっている。第4場面にそれが散見される。モモちゃんの泣き声（フェンフェン）や、受診時に発する音（トントンって、アーンって）などである。紙芝居版は童話版を元に作成されているが、その際にオノマトペがカタカナ表記に改められていることから、紙芝居作品に

おけるオノマトペの評価が、童話版のそれよりも重いということが読み取れる。

４．セリフ中心で、地の文は省略されることが多い

これについては、一例として、表１第２場面の前半を参照されたい。モモちゃんの症状から水疱瘡であることが推察されること、医院に行く必要があること、注射をされることになるであろうことについて、モモちゃんとママが会話をしている。この場面においては、童話版には〈モモちゃんが、いいました。〉〈ママが、へんじしました。〉という地の文があるが、紙芝居版にはない。

５．呼びかけ調の表現

これについては、第５場面の最後を見比べるとわかる。童話版はモモちゃんの、〈ママになんか分からない〉という意の強い反発のセリフで終わっているが、紙芝居版は同様のセリフの後に、つぎのような地の文が存在する。

ママは　こまって、ほーら、あんな　かお　して　います。

さあ、ママは　どう　するでしょうね？

みんなで　かんがえて　くださいね。

物語の補完について考えるよう求める、語りかけのメッセージをもって作品は終わっている。

以上のように、今回とりあげた紙芝居版にも、五つの特徴が認められた。

Ⅳ　紙芝居『ちゅうしゃにいった　モモちゃん』において丁寧に描かれている点について

本章では、童話版と比較して、紙芝居版の方が丁寧に描かれている点について見ていく。今回の考察対象作品に関しては、２点認められた。

１点目は、登場人物の特徴を分かり易く伝える言葉が付加されている点である。

モモちゃんを診療したおいしゃさんのセリフには、童話版と紙芝居版とで次のような違いがある。

「水ぼうそうです。」(童話版)

「ふうむ、これは　みずぼうそうですな。」(紙芝居版)

童話版は、病名を告げているのみである。一方紙芝居版には、感動詞の「ふうむ」と終助詞の「な」が付加されているところに注目したい。「ふうむ」は、意味としては「ふむ」と同じで、ここでは納得の意を表現するものとなっている。同義語には「うん」があるが、「うん」は、発し手の年齢や性別のイメージが幅広い。一方、「ふむ」「ふうむ」は、発し手のイメージを限定するところがある。女性よりも男性、子どもや若い人よりは年齢の高い人物にそぐう言葉である。そして、終助詞の「な」が、助動詞の「です」と共に使われる「ですな」にも、同じような特徴を認めることができる。紙芝居版でのおいしゃさんのセリフは、「ふうむ」で始まり、「ですな」で終わっている。このセリフにより、おいしゃさんがある程度の年齢の男性であるというイメージを、聞き手は受け取ることができる。

童話版にも紙芝居版にも、おいしゃさんの姿が絵として描かれている。それらはともに、中高年の男性医師の姿である。絵を見れば、どのような医師かのイメージは伝わるが、テキストがそのイメージを補強しているところに、紙芝居版の特徴を認めることができる。

２点目は、物語の一番の山場における、主人公の心情に関する情報が豊富であるという点である。先に述べたように、この物語には山場が二つある。モモちゃんが、おいしゃさんによる診療を泣かずに乗り切る場面と、そのご褒美に納得できないモモちゃんが泣いて抗議をする場面である。このうちでより重要なのは、モモちゃんとママの思いのズレが顕わになる後者であるが、ここではかなりの筆が費やされていることが表１の第５場

面からわかる。（第５場面の、破線部、一重下線ならびに二重下線が引かれている箇所を参照されたい。）以下、紙芝居版のこの場面のテキストの特徴的なところについて、見ていく。

紙芝居版の第５場面の初め、医院からの帰途のシーンには、童話版にはない部分がある。そこからは次の三つのことが見て取れる。モモちゃんが「うれしくて　はねながら」歩いていたこと。「おねえちゃんだもん」の歌を歌っていたこと。モモちゃんが、自分は強くてお姉さんで大きいのだということ、すなわち成長したということをママとの会話の中で確かめていること、の三点である。紙芝居版からは、モモちゃんの、注射されても泣かずに乗り切ったことへの嬉しさ、自分の成長を誇りに思っていることが読み取れる。

そして、ご褒美のガムを買う場面にも、丁寧な叙述が見える。ママがいつものガムを買おうとした場面では、紙芝居版のみに次のようなセリフのやりとりが見える。

「ママ、いま　なんて　いったの。」

「三十えんの　くださいって、いったのよ。」

「やぁんやぁん　六十えんのよう。」

「まあ、なに　いってるの。いつも、ガムは　三十えんのに　きめてあるでしょ、いけません。」

同じ箇所、童話版は次のように簡潔である。

「やあん、二十えんのガムよう。」

「まあ、いつもガムは、十えんのにきめてあるでしょ、いけません。」

自分はおねえちゃんとして成長したのだからご褒美も相応にと期待するモモちゃんと、これまで通りのご褒美以外は全く考えていないママとのズレがあること、そしてそのことにモモちゃんが強い衝撃を受けていることが、紙芝居版では明確に描かれている。

さらに、ママから「いけません」と告げられた直後、モモちゃんが泣きながら激しく抗議する場面にも違いがある。これについては、以下の表２にまとめて示す。

表２　紙芝居版の記述が丁寧である部分の比較表

幼年童話版	紙芝居版
	〈だってえ〉の繰り返しで、言いたいことがすぐには口から出てこない様子を表現。
	モモちゃんの気持ちが高ぶってきていることを地の文で表現。
	泣き声。（このあと、抜きの指示がある。）
「もう大きいから注射しても泣きませんね」とママが言ったのにというモモちゃんの思いをセリフと泣き声で表現。	激しい泣き声と、「もう大きいから注射しても泣きませんね」とママが言ったのにというモモちゃんの思いをセリフで表現。
注射をするときだけ「大きいんだもん」とママが言ったことへの抗議の気持ちを地の文で表現。	注射をするときだけ「大きいんだもん」とママが言ったことへの抗議の気持ちを地の文で表現。
※この要素は最下段にあり。	自分はもう大きいのだから、ご褒美のガムもそれに見合ったものが欲しいということと泣き声をセリフで表現。

モモちゃんが大泣きしている様子を地の文で表現。	モモちゃんが大泣きしている様子を地の文で表現。
自分はもう大きいのだから、ご褒美のガムもそれに見合ったものが欲しいということ、泣き声、ママへの抗議〈ママなんか、わかんないんだあ〉をセリフで表現。	ママへの抗議〈ママになんか、わからないんだあ〉をセリフで表現。

この場面のテキストの違いから見える、紙芝居版の特徴を整理すると以下のようになる。

・期待通りにはいかないことに直面したモモちゃんの気持ちが高ぶっていく様を丁寧に描いている。このことは、この場面の直前にある、これまで通りのご褒美以外は全く考えていないママとのズレに気づいたモモちゃんが受けた衝撃の強さを示している会話も含めて考えると、さらにその効果が分かる。

・激しく泣く様を表現することで、モモちゃんの納得いかない気持ちがより強く伝わる。

・自分はもう大きいのだからご褒美のガムもそれに見合ったものが欲しいと主張するセリフと、ママへの抗議のセリフの間に、モモちゃんが大泣きしている様子の地の文を挟み、さらに〈とうとう〉という副詞を入れることで、〈ママになんか、わからないんだあ〉という言葉の印象を強めている。

第５場面において、紙芝居のテキストが描いていることについて改めてまとめる。注射で泣かなかったことから、自らの成長を確認したモモちゃんは、嬉しさと誇らしさで舞い上がる。その姿には、成長の見合ったご褒美がもらえるだろうという期待が潜んでいた。しかしその期待がかなわないことに気づいたモモちゃんは、衝撃を受け、怒りと悲しみで気持ちが高ぶっていく。激しく泣く様子と、抗議のセリフを交互に示し、最後にママへの抗議を象徴するセリフ〈ママになんか、わからないんだあ〉を他のセリフから切り離し単独で提示することで、印象づけている。

ママの期待に応えて、泣かずに注射を受けたのに、というモモちゃんの悔しい思いが明確に伝わる文章表現と言える。

なお、童話版の第５場面が簡潔になっている理由だが、童話版にのみ後日談があることと関わると考える。水疱瘡完治後、モモちゃんはキュウリのとげを水疱瘡の症状に見立て、薬として糊を塗ってごっこ遊びをする。ところが、キュウリを食材としてしか見ないママに取り上げられてしまう。ここで、モモちゃんはまた泣き、「ママになんかわからないんだ」と言うのである。モモちゃんとママとのズレが、再度提示され、この物語は終わっている。ズレの再提示があるため、１度目のズレの場面でのモモちゃんの感情の描写を強い表現を以て描くことをしなかったのではないかと考える。

このことを踏まえて、再度紙芝居版のテキストを見てみるに、紙芝居版では、モモちゃんとママとのズレの提示が一回のみである。それゆえ、モモちゃんの無念な思いをより丁寧に描くこととなったのではないかと考える。

Ⅴ　結論

以上、幼年童話「ママになんか　わかんない」と、それを紙芝居にした『ちゅうしゃにいった　モモちゃん』のテキストについて比較した。『ちゅうしゃにいった　モモちゃん』にも、紙芝居のテキストに認められる一般的な傾向（情景描写や山場以外での心理の伝え方が簡潔、オノマトペの活用、セリフ中心で

あること等）を認めることが出来る。しかし、山場では、主人公の心理の動きを童話版よりも丁寧に描き、作品の核である言葉〈ママになんか、わからないんだあ〉を印象づけるなどの工夫が凝らされている。

このことから、紙芝居のテキスト表現は、幼年童話に比べると常に簡潔なものになっているとは言えないことが理解されよう。紙芝居でも、必要な場面においては筆が費やされている。読み聞かせの際には、このことを念頭に置く必要がある。丁寧に描かれている部分については、特にその場面の重要性を踏まえた上で読み方を工夫し、その作品の魅力が聞き手に伝わるよう配慮することが大事である。当該作品についても、第５場面の初めでのモモちゃんの浮き立つ気持ち、期待通りには行かないことを知った時の衝撃、強い怒りと抗議の気持ちの表れとしての泣きと〈ママになんか、わからない〉という言葉の強さを十分に考えて読み聞かせを行いたい。

紙芝居版は、「ママは　こまって、ほーら、あんな　かお　して　います。さあ、ママは　どう　するでしょうね？みんなで　かんがえて　くださいね。」という地の文を以て終わっている。聞き手が、この投げかけをどう受け止めるかも、第５場面の読み方に影響されることであろう。

紙芝居のテキストには、絵本や幼年童話のそれに比して簡潔という独自の特徴がある。しかし、物語展開によっては、その特徴から外れるような表現をとることもあり得る。紙芝居の独自性を理解しつつ、一つ一つの紙芝居作品ならではのテキスト表現を、まず、読み手が味わい、読み聞かせの工夫に生かすことが肝要と考える。

引用文献

１）まついのりこ.紙芝居・共感のよろこび. 43-44. 東京: 童心社; 1998.

２）子どもの文化研究所. 紙芝居・演じ方のコツと基礎理論のテキスト. 92-96. 東京: 一声社; 2015.

３）原田留美. 幼年文学の表現－『ちいさいモモちゃん』にみる童話の言葉と紙芝居の言葉－. 精華女子短期大学紀要. 2001; 27: 75-85.

４）大元千種. 保育現場における紙芝居の活用の課題―保育学生の紙芝居経験を手掛かりとして―. 筑紫女学園大学・筑紫女学園大学短期大学部紀要. 2013: 8: 177-188.